

耐える少女、闘う少年？

〜魚住直子論

相川美恵子

1 はじめに

魚住直子はデビュー作『非・バランス』（講談社 一九九六）以来、学校を舞台に、「空気を読む」とか「スクールカースト¹」とか呼ばれる人間関係を生きる子どもたちを描き続けている。いわば現代の最前線で闘っている作家の一人である。だが物語の作り方という点では、彼女の作品はいたって古風だ。そこでこの小論では、魚住作品を物語の作り方という視点から考えてみたい。

2 耐える少女たち

『非・バランス』の主人公「わたし」は中学入学時に友だちは作らないというルールを決め、二年になった今も頑にそれを守っている。「たいせつなポイントは、わたしはもう「される側」じゃないということ。つまり、わたしには友だちがいらないのじゃない、自分からつくらないことをえらんだということ」とあるように、「わたし」は自前のルールを作ることで、この状況を作り出したのは自分なのだ

と自分自身に言い聞かせている少女だ。しかし自前のルールで現実を読み替えようとすればするほど現実からの抵抗を強く感じて息苦しさは募り続ける。

『家のダンス』（講談社 二〇〇〇）の深澄（中三）も「わたし」に似ている。彼女は男に身体を抱かせる時、行為が終わるまで頭の中で一つのイメージを機械的に繰り返す。抱かせてやっているので現実を読み替えることで彼女は自分の誇りを守ろうとするのである。

また、「赤土を爆走」（『野生時代』二〇〇六・一〇、『きみが見つける物語』角川書店 二〇一〇収録）の桐子（中一）の場合は、「貧困に苦しむ世界の子どもを助けている私」という壮大な物語を作ること、クラスから向けられている悪意や嘲笑に対抗しようとする。彼女は自前の物語を生きることで、具体的には小遣いを寄付し続けることで、私は決して哀れな被害者ではないと身構える。しかし彼女の超然とした態度は一層の敵意と憎悪をクラスの中から引き出すことになる。なお本作には、あなたが優しい子だということ